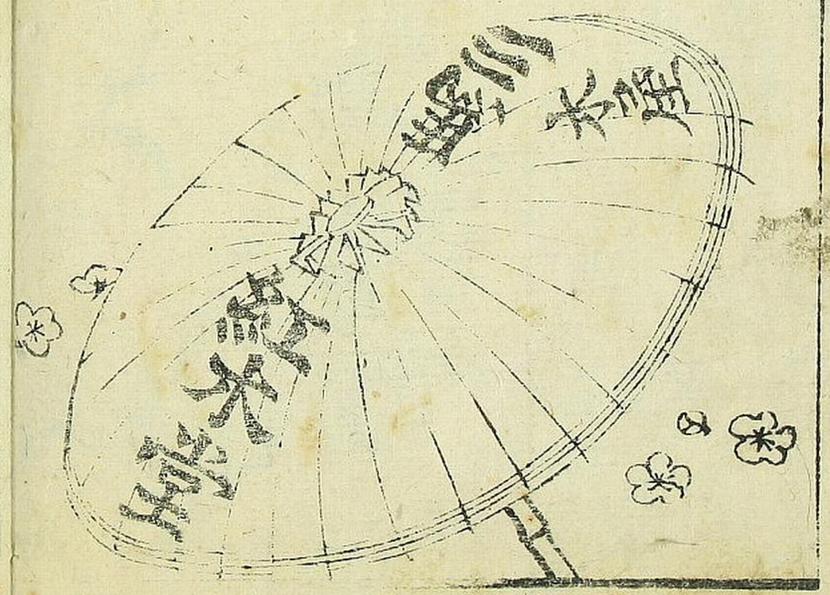
木宗梓
鶴田真容編輯
初編下

A467
2

波華 西梅

大塩騒動



48-8131

初編上巻より

夢より説出る一條ハ水野軍記より邪法を受継し女軍記とゝもふ空田貢と名を改め大坂八坂の比町より隠陽院と称し事ら切利支丹の法を学ひしゆ軍記ハ病死よて貢ゝ

ゝゝゝゝの全を施し宗門より返る信仰の者あり凡十人程も宗門けりゝゝて京大坂より邪宗の者返く充満せり

是を信ずる神の如く思ひ日々加持祈禱する者市をなしけるゝて平八郎深く怪しゝ何ぞ有ゝと奉行山城のゝゝ

どのゝゝ上町人より姿をやつし貢ゝゝて加持を頼ゝと日々至りて其の修法を見ゝるあやきてるゝぎうゝ貢ハ更よりのつ手能

信者とゝゝゝへと邪宗を

すむゝゝの平八郎

大塩平八郎朋友を誘引て遊里に詩作して樂しむ

◎浪平八郎が家に貧が悲嘆まことに
折り〳〵盆の拵にて女の隠せるまでも
家の内火の如くとろげるとするに
あまど平八郎に見
へず女どもは泣
事あり昼より山
嶽の頃どのよ
風の如く地と
打倒れ

◎大塩平八郎

◎大塩平八郎傳

◎浪平八郎が蔵書を賣
り武道の事のみ
論じける平八郎が
隣りよりの述面あり
けるに相違を頼ひ
書生の塾をとり立
頼ひよ傍て寄宿
を許しけるに塾中
よ在るものの古十人
とて入門のもの八人
一君父に忠孝を
〳〵天下國家の
為に隙なを

大塩平八郎力を勤て人民の訴訟を聞

[ことき]撥る孔をも遠背らさすまずき
上昔誓紙をとり又法度〻〻何
程懇意のものゝ為りとも奥向
を存ずず扶類まても表
座敷まて對面すれ
どゝ為べきとく見
を恐をけるとそて
扱も平八郎へ
この役人をひい
きを受奉
も皆武事を忘り

◆平八郎りん重
なるゝ心を異なる
事ありけまゝ何
とかくんとろ快
を生し教ることに
暮しけ
ある時
傳聞
天下太
平はし
武家

なぜろの心政をよ撥さらる
而の役人賄賂を貪り上を道
そろ〻〻無学無能の小人時を選ひ
乃徒の君子もをちひら
まずか為を思ふも
のに遊ろて小人の
さるを妨〻げら
を罪を蒙るもの
多〻亡父の遺訓
天下國家の為
に一命を捨てるを
上とゝされ事今よ
耳まとまり耳〻ぶまへ町家の

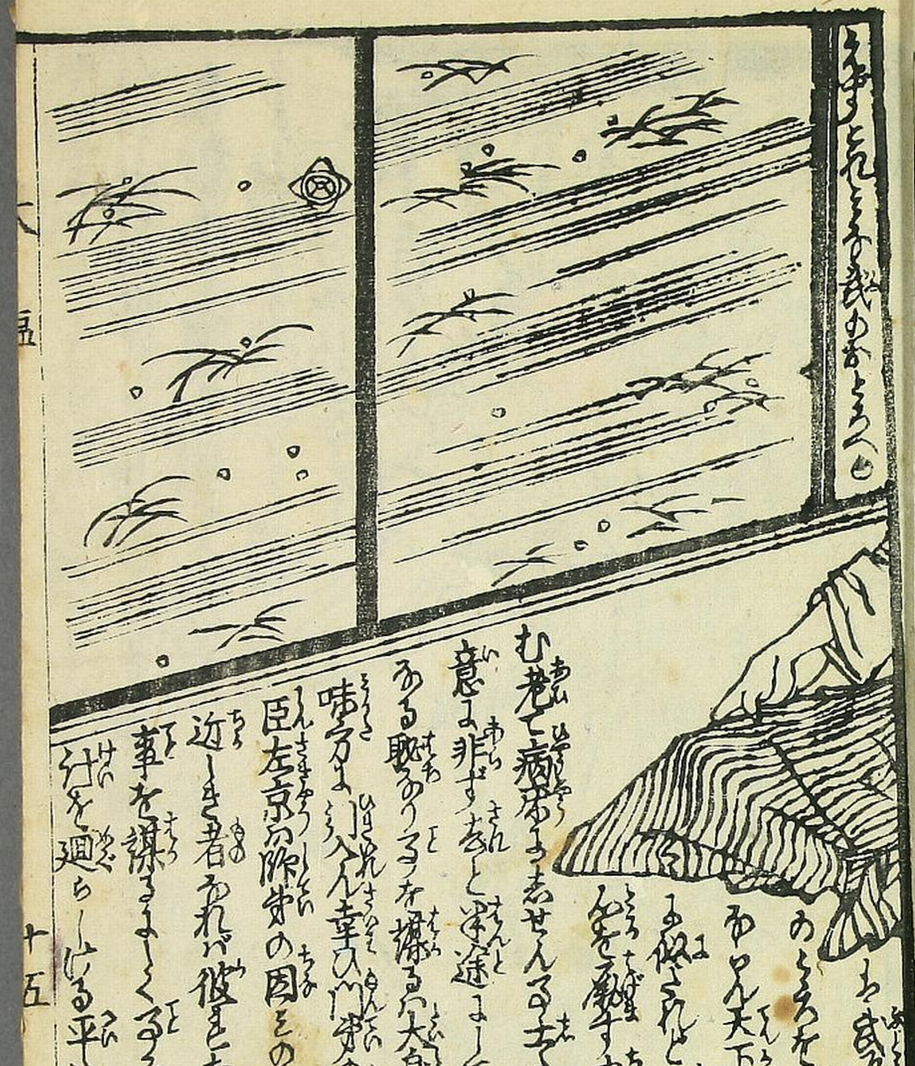
大立女陽天

我朴之図

○そもそもあるべき物にあらず

富貴の者の貧窮を見下し武家の制し難き失敗をくゝ去るとも今この為る制す為る軽を

大塩平八郎



むかしの風流士のうちを立る基と為り人天下へ精〜忠義の心を厳す忠義の一つ為ち

意よ非ずと遂よって賢臣を大

ある取るのりるを撰る大臣の者を二人

味方よ入れ幸ひ門弟の内仕官家老

臣左京の源弟の因をのこらず引

近しき者あれば彼を味方よ入れ

事を謀るよくるるやと稚く謀

計を廻らし居る平八郎陽明

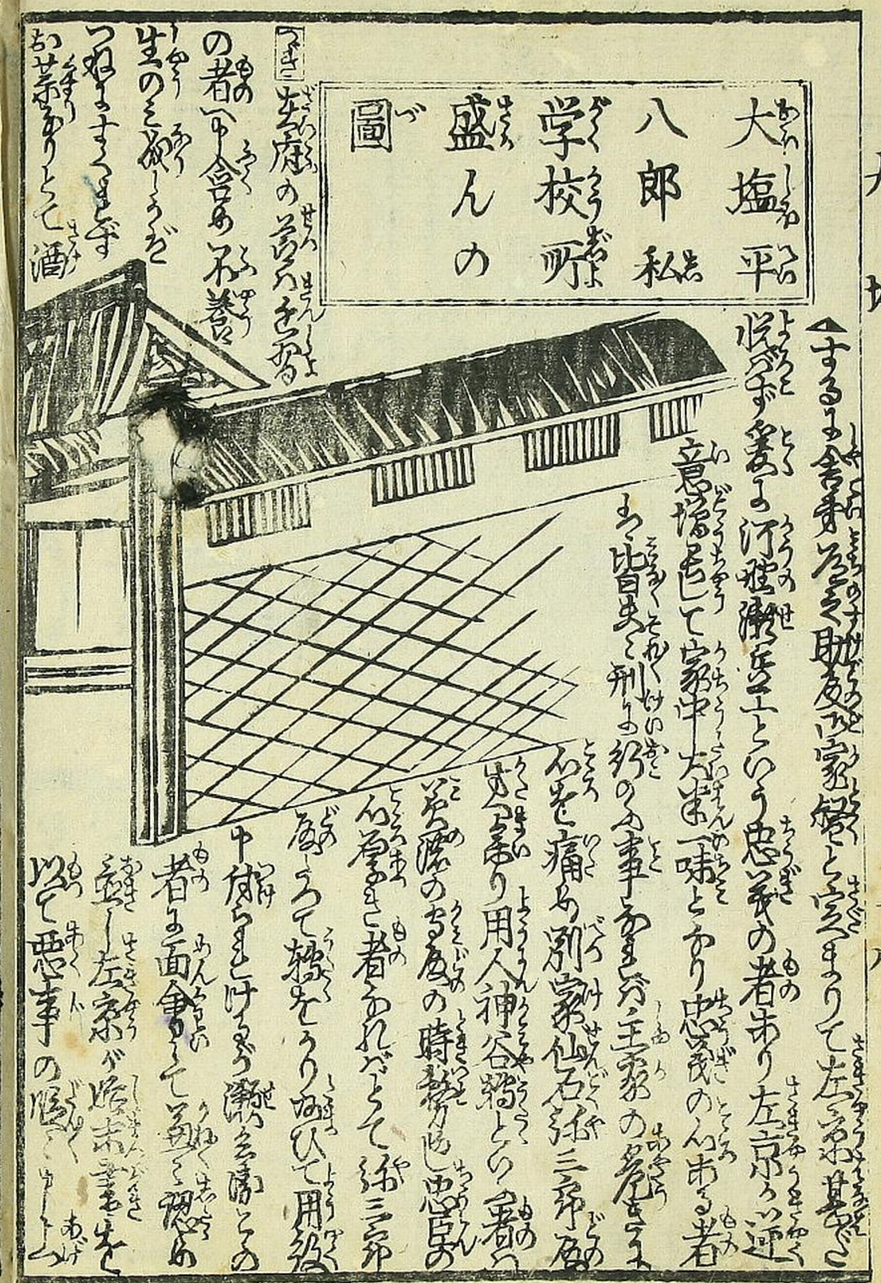
つぎ 浪のうるわしく東北二百里の間の数百を
取手役人 宿
左二門
百
特別

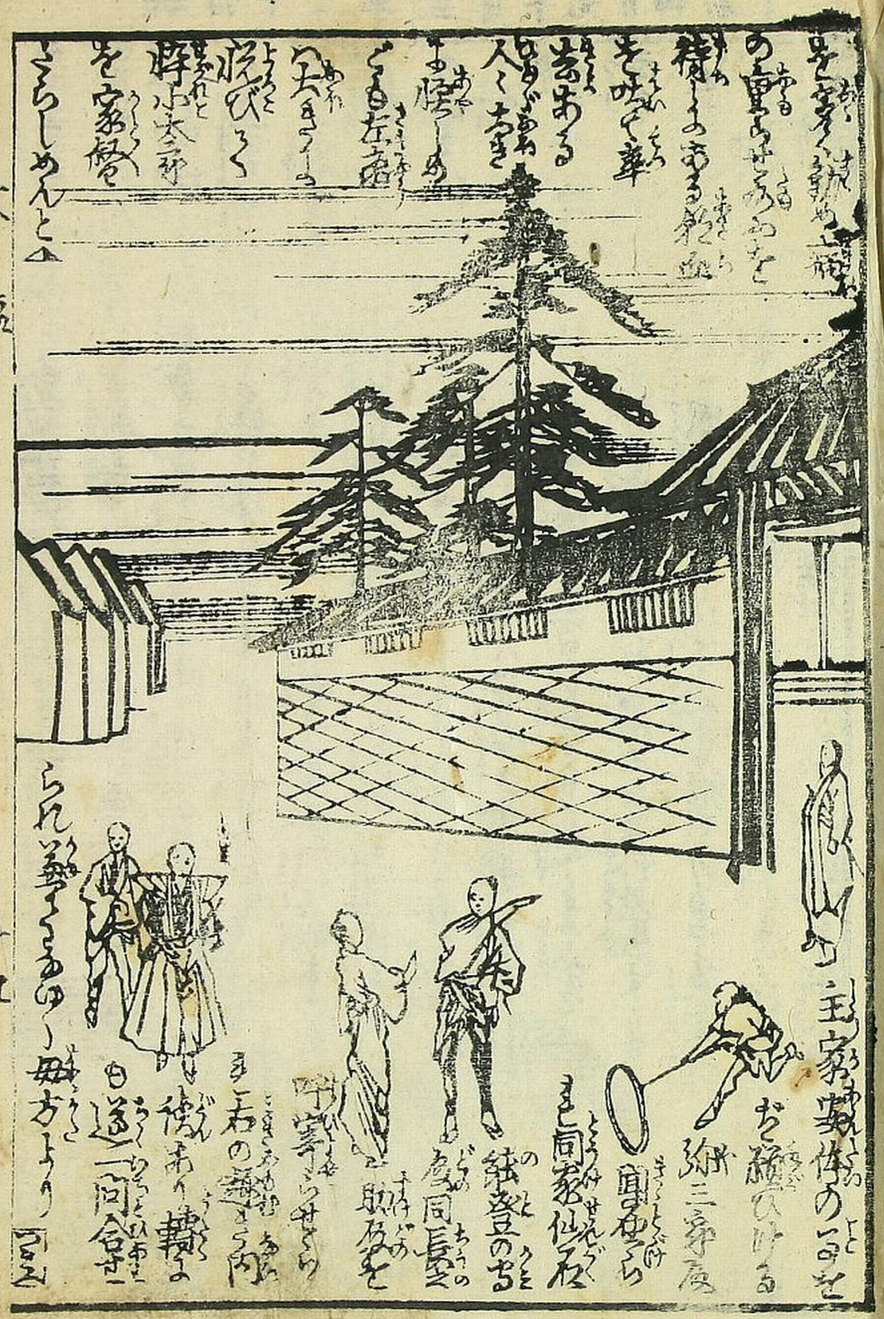
豊田貢 助
三百両
右ハ順
大塩平八郎
平八郎より
御用

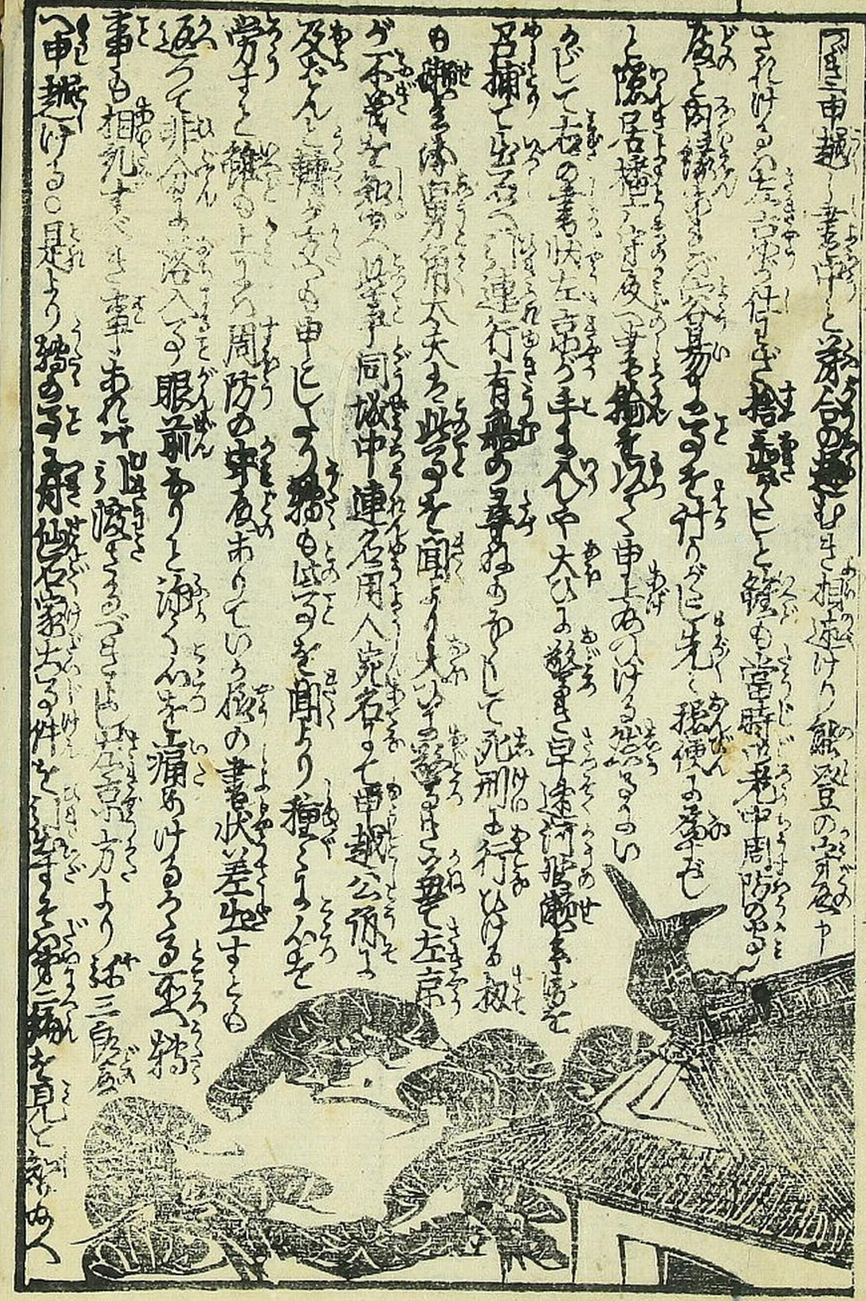
大塩平八郎
松下林太夫
松平主
大塩の家来

平山助次郎

大塩平八郎私学校所盛んの圖

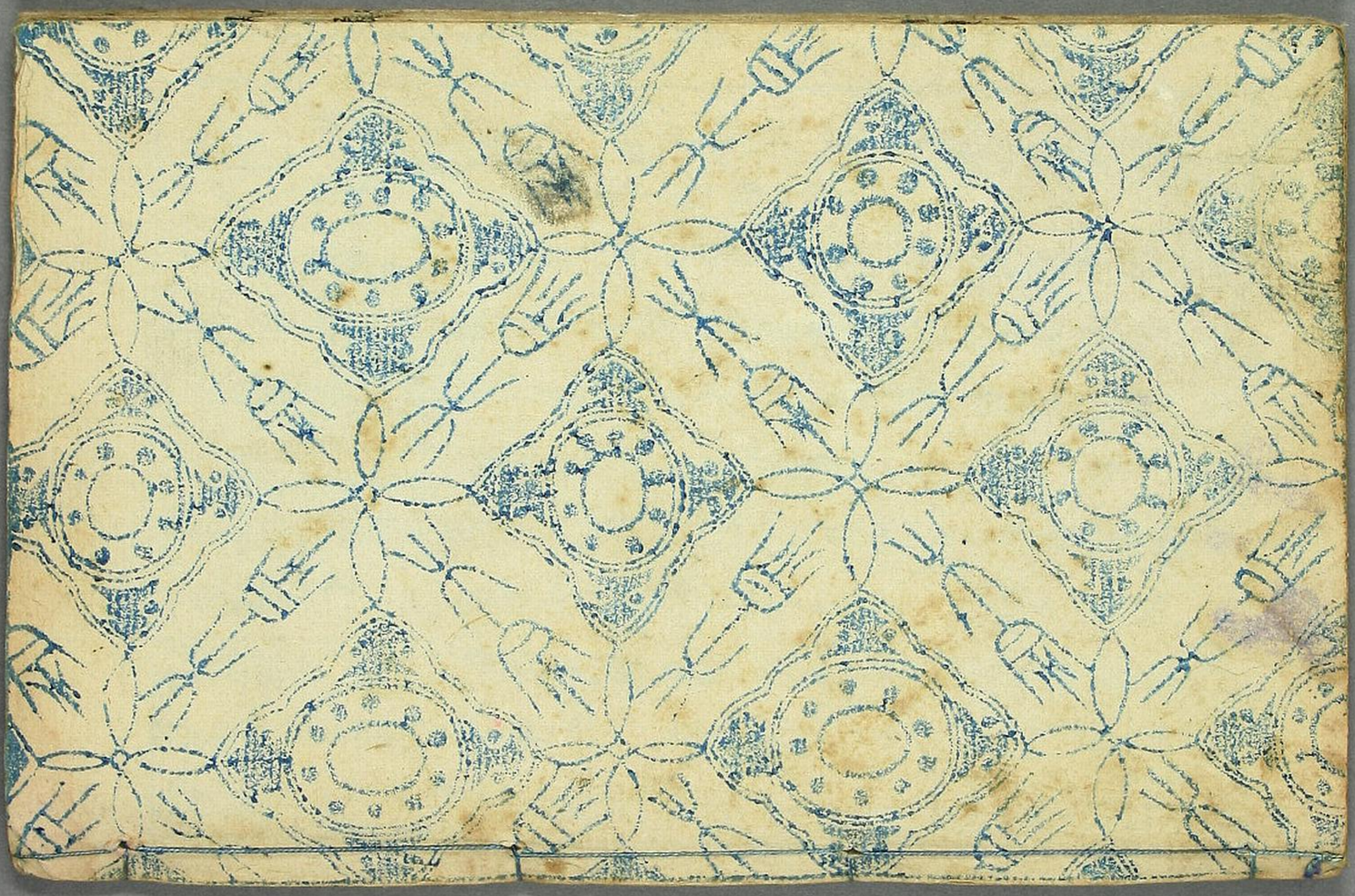






つぎ申報〜者ども〜と称合の趣ひさ相違けり紙登の立ずるか
されけるの左京仕ぎ捨ヒと鐘も當時は老中周防の守
屋と内縁あるを合易ことを計りなに先く猶便の事ども
懐居樋ヒ受夜〜事を拘ひく申上あのけるなるのい
ゝじて右の者は左京わら手まえ中大ひの驚きと早速御指図まを
召捕て出るへ〜連行有最の事あるのあ〜して死刑に行ひける叔
日蓮宗の僧侶用人大夫ゝ出るを聞より大ひの驚きと左京
ゲ不審を知の出事同坂中連名用人完者ゝ申越公儀ゝ
及んと輝ゝ申しゝ猶も出るを聞より種〜ゝ
労すと雖ゝ周防の守屋あり〜ゝの書状差出すゝ
恐ゝて非分を沿入るの眼前あり〜と涙くんを痛あけるゝ玉物
事日相乱すく事あれ〜ゝ渡ゝるつきゝ左京方より三度
申振ける。是より猶ゝ〜ゝ家出石家出ゝ

蔵の松徳川日記 三冊 開化ヶ江 二冊 佐野藤郎代記 三冊
鈴木仕官部宮記 三冊 義士録傳 二冊 東の花開化物語 為朝一代記 円
豊臣大閤外伝 円 開化大津絵巻 源平合戦記 円
伊賀越仇討 円 開化ヶ江 円 大坂物語 大一坊譜 円
桑表噂の新宿 円 義経一代記 円 小栗自井實録 円
徳川戦記 加藤清正代記 円 忠信義経記 百人一首 円
伊達政宗記 日本性文傳 円 天下茶屋仇討録 女雄百人一首 円
浪華の梅 諸国 鬼神お松 佐倉宗五郎 川中島戦記 二冊
大久保仁左衛門 小栗判官代記 円 石川重郎代記 関原軍記 二冊

地本 錦絵 問屋 馬喰町二丁目十番地 山城屋 大森宗次郎

010190510935